

1. 【研究の概要図】

この応募用紙に記載する研究の概要を以下の枠内に図式や分かりやすい色を用いて、概要図を作成してください。
※様式の変更・追加は不可（以下同様）

研究課題名	ハラスメント現場における司法面接の運用の検討
-------	------------------------

ハラスメント
他者に対する言動が本人の意図には関係なく、相手を不快にさせたり不利益を与えるもの。主に教育現場や職場で起こる。

どのような発言がセクハラとなるのか？

<予備調査>
方法
セクハラ発言とは一体どういうものかを検討するために、質問紙調査を実施。大学教員(50歳)から大学生(20歳)に向けた発言とし、セクハラに当たるかどうかを大学生141名(男性48名、女性93名)に対して7件法で回答。

結果
①セクハラだとされる評価は同性間に比べて異性間に高い
②質問項目がセクハラ・パワハラ・日常会話の3つに分類
③性的な内容が含まれると分類された項目は他の項目よりセクハラ評価が高い

図1 性別別性別会話ごとの平均面接点平均

図2 発言の性別別との平均面接点平均

非対面でも司法面接を有効的に実施できる可能性

司法面接
虐待や事件、事故の被害を受けた疑いのある子ども（および障害者など社会的弱者）からできるだけ正確な情報をできるだけ負担なく聴取することを目指す面接法

実際の司法面接イメージ

ハラスメント場面を司法面接で聴取したら？

<予備調査>
方法
予備調査で分類された質問項目から男性教員と女子学生の会話という架空の設定でシナリオを3つ（セクハラ条件、パワハラ条件、日常会話条件）用意し会話音声を作成。参加者に音声を視聴させ内容について司法面接で聴取。

表1 音声条件におけるD均正答率(%)

	セクハ1 条件	0 パワ1 条件	日常条件
	(%面接)	(%面接)	(%面接)
= 体情報	M 45.9%	50.7%	42.0%
SD	6.14	12.56	11.72
情動会話	M 55.1%	50.9%	42.2%
SD	8.44	16.44	16.23
総談	M 44.2%	51.1%	42.4%
SD	9.66	13.41	8.28

結果
①どのグループにおいても面接に偏りはなかった
②セクハラ音声の中盤、パワハラ音声の終盤で日常会話音声より正答率が高かった

ハラスメント体験は供述に影響を与えることがわかった

ハラスメント現場での事実確認として司法面接を活用する

<研究1>

非対面の司法面接は対面して行う司法面接と同様に正確な証言は得られるのか？

- 対面司法面接
- 非対面司法面接（映像と音声）
- 非対面司法面接（音声）

3つの方法を比較

実験の説明

```

graph TD
    A[実験の説明] --> B[ブレイクアウトルーム①  
映像提示  
(被面接者)]
    B --> C[ブレイクアウトルーム②  
映像提示 or 直接の説明  
(面接者)]
    C --> D[面接実施]
    D --> E[質問紙回答]
    
```

● 参加
··· 待機

<研究2>

ハラスメント場面の事実確認としてその他の聴取法より司法面接が有効か

ハラスメント要素を含む映像の視聴
(ハラスメントの間接的体験)

司法面接 自由報告 誘導質問

供述 供述 供述

供述の正答率や正確性について検討

<研究2>

相談者のハラスメントか否かという判断がそれを客観的に聞く第三者によっても支持されるのか？

ハラスメント相談の面接場面が警察や相談機関で証拠として扱われる場合を想定

ハラスメントか否か判断

どのような基準で判断されているのかを検討